



8月21日に公開された「酸素ステーション」＝東京都渋谷区

## 明かりは見え始めているか？

### 根拠のない楽観の危険性



8月も後半になると、来年度の政府予算概算要求のニュースが伝えられるようになる。必要な政策に必要なだけの予算をつけることは不可欠だが、本当に予算は適切に使われているのだろうか。

大きな金額が計上された。そして昨年度には「GOTOキャンペーン」の挫折などもあって、多額の繰越金を計上することになり、政府の裁量で支出できる予算枠が膨れあがった。

懐が豊かなはずなのに、なぜ休業などに対する補償が困窮した中小零細事業者になかなか届かないのか。そして疲弊した医療に対する人材と病床の確保、さらに必要となる医療機器の設備にぎちつと資金が提供されてきたのか。

新型コロナウイルスの第5波の感染拡大に直面してようやく、酸素ステーションという間に合わせの施設に手を付けたり、病床確保の要請を行ったりしているとはいえ、いかにも遅きに失している。重症化を防ぐために酸素投

与が時間稼ぎに有効であることは、最近になって分かったことではないだろう。

感染症の専門家たちは、どのような手を打って備えなければならぬか予測できたはずだ。そんな専門家の意見が政権中枢に届かない、届けても無視される。その繰り返しが今日の最悪の事態を招いている。多額の準備費がいまだに使い残されていることからみて、予算の制約があつて手を縛られていたわけではない。感染症対策に費やす財源を惜しんだ結果だろう。

先手、先手と対策を打ち続けた結果、「明かりはハッキリと見え始めています」と菅義偉首相は、根拠のない楽観的見通しを表明している。これがお得意の原稿の読み間違いではないとすれば、いったい首相はこの国のどこをみているのだろうか。

横浜市長選挙で、これまでの感染対策が批判され、とりわけ政府への不信感が敗因と指摘さ

れても、「謙虚に受け止める」と言いながら全く改まる所はない。首相のこの言葉は、「聞き流し」「無視する」とことと同義なのだ。

根拠のない楽観は、国民を悲惨な未来に追いやる。そんな危険が迫っているにもかかわらず、9月から10月にかけて自民党の総裁選、総選挙が続くことになる。日本の将来を左右する二つの選挙だが、具体的な政策論争を避けた派閥次元の駆け引きが自民党内では続いている。しかし、総裁選に走り回る前に、準備費を生かした有効なコロナ対策を打ち出すことに全力を集中すべき責務がある。

権力の座に執着している政治家には、自宅療養を求められ、満足な医療も受けられない感染者の不安が目に入らない。しかし、国民の命と生活に対する無関心は、選挙民から厳しい審判を受けるだろう。

(東京大名誉教授 武田 晴人)